**日曜午後例会「瞑想と霊性の生活」勉強会　第４回　（２０１８年８月５日）**

**前回の復習と補足──（1）聖典勉強はなぜ大事か（８つのポイント）**

「良い結果を得るには目的を理解して勉強することが肝要」という理由から、前回は「聖典を学ぶ目的」について8つのポイントに絞って話をしました。

聖典勉強がなぜ大事か

1. 真理【神、ブラフマン】とは何かが分かる
2. 神【ブラフマン、バガヴァーン、パラマートマン】と私【アートマン】の関係は何かが分かる
3. 聖典が人生のガイドラインとなる（霊性の修行が人生にどう関係あるのか；霊性の修行によりどのような結果が出るか；なぜ霊性の修行が必要か）
4. 霊的な生活に必要なものが何か分かる
5. 悟りの方法が書いてある（＊以下のどの方法も悟りという最終目的は同じ）
   * カルマ・ヨーガの悟りの方法＝神様につながっている状態で仕事をする（＝すべてのものに神様を見て非利己的な仕事をし、結果を自分のためではなく神様に捧げる）【＝カルミとバガヴァーンの】
   * バクティ・ヨーガの悟りの方法＝神にたいする愛（＝神のすべてを知りたい、悟りたい）により礼拝、讃歌などをおこない、やがて神像だけでなくすべてのものの中に神を見る【＝バクタとバガヴァーンの】
   * ギャーナ・ヨーガの悟りの方法＝真理と真理ではないものを識別し（＊識別だけでは意味がない。それだと「識別大好き・議論大好き・しかし真理にフォーカスしない」類の学者と同じになってしまう。真理にフォーカスが大事である）、真理を好きになり、つねに真理について考える【＝ジーヴァートマンとブラフマンの】
   * ラージャ・ヨーガの悟りの方法＝瞑想をして、心をしずめ、心を分析し、心の源までいくと（ふつうの心がなくなり）本当の心（＝純粋な心＝純粋な知性＝アートマン＝自分の本性）があらわれる【＝アートマンとパラマートマンの】
   * サハジャ・ヨーガの悟りの方法＝つねに神の御名を唱えることで徐々に心が純粋になり、悟りという結果を得る
6. 悟りの障害は何か、どう気をつければよいかが分かる  
   瞑想しても修行が進まないことや、生活や仕事のことを考えると自分の考えが神から離れてしまうことがあるが、これは欲望、執着、自惚れなどが原因で、この障害をコントロールしないと修行を進めることは難しい。またいつも神様のことを考えたくても、前のサムスカーラが障害となり、その影響でまったく別の考えが出てきてしまったりする。聖典にはそうした障害やそれについてどうしたらよいかが書いてある。
7. 悟るとどのような結果を得られるか  
   なくなるもの＝恐れ、苦しみ、悲しみ、無知。得るもの＝至福、知識、自由。すなわち、すべてのカルマの結果がなくなり解脱する
8. 神聖な交わり（ホーリー・カンパニー）の代わりとなる

**前回の復習と補足──（2）シャンカラの言葉**

シャンカラーチャーリアは**「人間の命で生まれたこと、偉大な悟った方との神聖な交わり、解脱への願望の３つは神の恩寵によるものだ」**と言っています（👉P14L1）。しかしほとんどの人は、これらgood fortune, good luckは自分が得たもので、神の恩寵であるとは全く考えていないようです。人間としての命の、何が特別なのかと思ったり、悟った人と交わるどころか好きになれずに避けたいと思う人もいます。寺院やお坊さんを好きになることは本当に神の恩寵によるものなのです。がしかし信者であっても、解脱へのやる気が出ない人も大勢います。信者ですが、解脱はこわい。なぜなら解脱と言われても想像ができないし、欲望から離れてすべてを抑制して放棄して…と言われても想像がつかないからです。すると「快楽は困るけれども仕方ないもの」となります。インドは他の国よりも解脱について考える人が多いですが、それでもインドも同様で、神様を好きな人はたくさんいますが、家族より神様が好きとか、生まれ変わりや輪廻はいらないと考える人はごくわずか、神に祈る理由はほとんど世俗的なものです。しかし、もし解脱したいと本当に思うなら、それは絶対に神様の恩寵によるものです。恩寵を受けている「しるし」は、神様が好きであること、そしてあきらめずに努力していること。最後まで努力する──それが私たちの義務であり、そこまですると、神様は助けてくれます。しかしある程度まで行けば安全だ、と思わないでください。マーヤーの力は偉大です。忍耐し、あきらめず、油断せず、最後まで神様を悟りたいという気持ちが大切です。

　　～　　❀　　～　　❀　　～　　❀　　～　　❀　　～　　❀　　～　　❀　　～

**「瞑想と霊性の生活」第４回の勉強範囲：**

**第１部　霊性の理想　THE SPIRITUAL IDEAL**

**第１章　霊性の探求　THE SPIRITUAL QUEST　P15~16**

**・📖 （P15 L3）「永遠に続く満足はこの世にない」　No lasting satisfaction in the world**

***何かを手に入れたとき、それが自分が本当に欲していたものではないと気付くことがよくある。求めていたのかも知れないが、手に入ったときにはその欲望が消えていて、またほかの欲望が取って代わっていることを実感するかも知れない。***

皆さんにもこのような経験はありませんか？　それはおもちゃを欲しがる子供のようです。あるおもちゃが欲しくて親にねだって買ってもらっても、1日か2日遊んだら、すぐにまた、お店で見た別のおもちゃを思い出し、それが欲しくなる──そういう経験、皆さんにはありませんか？　私たちは年をとっても心は子供のようで、いつもいつも新しい遊びを求めています。食べ物でも、洋服でも、シャンプーでも、お酒でも、欲しい対象が変化することを好み、同じものでは満足しません。あるいはもっとたくさん欲しくなったり、一度満足してもすぐに新たな欲望がわきあがってきます。

シュリー・ラーマクリシュナは、一度欲望を持っても、満たされたらすぐにその欲望を放棄することができましたが、これはとても特別なことです。

あるときシュリー・ラーマクリシュナは、美しいショールが突然欲しくなりました。そしてモトゥル・バーブ［脚注1］が用意した高価なカシミヤのショールをとても気に入って、最初は喜んで身にまとっていました。しかし数分後には、「これが一時的なものなのだ。これがうぬぼれの元なのだ」と気づき、識別をして、ショールを床に捨て、唾を吐き、踏みつけ、その欲望を手放しました［脚注2］。これが「一度だけ欲望を満足して終わり」の例です。

しかし私たちは「これで最後」と思っても、欲望は次々に浮かび、それに終わりはありません。火を消したいのにギー（油。精製バター）を注いでいるようです。ギーは欲望です。水ではなくギーを注いだら、もっともっと欲望が増えて、反対の結果になります。

マハーバーラタ叙事詩にヤヤーティ（Yayati）王の話があります。その王様は呪いによって、突然壮年から年寄りの身体になってしまいました。しかし肉体は年寄りでも内面的にはまだ若いので、快楽などたくさんの欲望がありました。その王様には５人の息子がいて、彼らの誰かが身代わりになればヤヤーティは元の状態に戻れるということでしたが、長兄から四男までは身代わりを拒否されました。しかし父親に従順な一番下の息子がその願いを受け入れて、ヤヤーティは念願の若い肉体に戻り、長いあいだ快楽に浸ることができました。しかし最終的にヤヤーティは悟りました。たくさんの快楽を得て、たくさんの欲望を満足させても、欲望は減るどころかどんどん増えていくと。その時に王様が言った言葉がマハーバーラタの有名な節になっています──*欲望の炎は、それにふけることで消し去ることはできない。それはかえって火に油（ギー）をくべるようなものだ──。*

ヤヤーティが欲しがった快楽の対象は何でしょうか？　それは、永遠・無限なものではないでしょう？　一時的なものです。一時的なものですから私たちは一度は満足しますが、永遠に満足することはなく、また別のものが好きになります。

**・📖 （P15 L6）*自分が憧憬するものの本性を取り違えて、それを世俗的に方向付けてしまう人が多いが、永続的・普遍的でないものによって人間の渇きが癒やされることは、実際にはありえないのだ。この点ではどんなに自分を欺こうとしても無駄だ。繰り返し繰り返し相変わらずの虚無感が、しかも多くの場合、以前より恐ろしく無慈悲な形でつきまとってくる。人々は幸福を外部の対象のなかに、男女の身体のなかに探し求める。***

私たちは潜在意識の中では、「***永続的・普遍的でないものによって人間の渇きが癒やされることは、実際にはありえない***」と知っているのかもしれません。だから、「これで最後にするから」と、自分でその心──永遠で普遍的なものでなければ満足できないと知っている “良心” ──をだまして、欲望を満足させようとします。しかし “良心” はすべての人の中にあっても、その声はとても小さくて、耳に入らないか、もしくは（ふつうの心が）聞きたくないと思っています。これが**decieve oneself（自分を欺く）**の意味です。

自分を欺く、つまり自分で自分をだますことは、大きな矛盾です。でも “良心の声が聞こえない人” にはその矛盾がないので問題にはなりません。しかし “良心の声が聞こえる信者” にはこの矛盾が問題になります。そしてそのような問題のとき、聖典の導きが必要なのです。聖典の勉強が大事なもう一つのポイントは、聖典の勉強をすると良心の声がもっとはっきり聞こえるようになることです。

**・📖 （P15 L10）*しかし真の幸福は私たち自身のなかにあるのだ。それは生得の奪われざる財産だ。外界の事物は決して真の幸福をもたらさず、手にしたほんの僅かのものもたちまち消え失せていく。***

真の幸福は中にありますが、しかし “ふつうの人” の楽しみの対象は外であり、楽しみを外のものにゆだねています。しかし外の楽しみは中の楽しみの反射に過ぎません。夜のあいだだけ、波が静かなあいだだけ、雲がかかっていないあいだだけ、池に反射する月のように、反射は一時的なものなのです。

では、 “霊的な人” はいつから始まりますか？　それは、***true happiness lives within ourselves（真の幸福（真の楽しみ）は私たち自身のなかにある）***を理解したときです。それが、霊的実践の本当のスタートです。中のものとは反射の源、つまり永遠です、つまり神様と一緒です。霊的な人は幸福（楽しみ）を中に求めます。

かぐわしい香りは自らのおなかの中から漂っているのに、ジャコウジカ本人はどこからその香りが生じているのかわからず、あちこちを探しまわる──というジャコウジカの話のように、真の幸福は、自分の中に生まれながらにあるのです。それはつくりあげるものでも、もらうものでもありません。以前は気づきがなかったが、霊的実践をして、瞑想して、祈って、そして中のものに気づくことが出来ます。霊性の生活の始まりのしるしは「気づき」です。

**・📖 （P15 L12）*私たちは人生全体を見渡さずに、ある一時期に目をやるという誤りを犯している。***

たとえばある食べものが健康によいかどうかは、食べつづけた結果で判断することができます。結果は判断に重要な情報ですが、しかし短いスパン（期間）での結果をもとに判断すると、過りを犯す可能性があります。ですから最終的な結果まで待って判断してください。

・最初の結果（immidiately result）で判断する人は思考が浅く、ネガティブな考えの人

・最後の結果（last result）で判断する人は思考が深く、ポジティブな考えの人

しかし私たちは最初の結果ばかりを重視しがちです。なぜならふつうの快楽は、すぐに、おもしろい、甘いという結果が出るからです。

バガヴァッド・ギーターの第18章37/38節は、

・ラジャス的な楽しみは、最初は甘く、最終的に苦い

・サットワ的な楽しみは、最初は苦く、最終的に甘い

と言っています。ですから「（今がたとえ良くても）最終的な結果はどうか」と判断のための時間のスパンを長くとってください。これは人間関係を築くとき、子どもを育てるときなど、すべてのやり方の基準です。

**・📖 （P15 L13）*人間的愛情や人間的情熱といった世俗の関係のなかにも、確かに一時的な幸福はある。しかしこうした一時的な幸福は決して真の幸福ではなく、むしろその反対だ。***

人間関係、人間同士の愛も同じです。最初は甘い、最後は苦い、がほとんどです。そこに幸福も楽しみもありますが、しかし最後までは続きません。すると結果は楽しみどころか、悲しみ苦しみという反対の結果になります。人間関係がどのように変化するか、人間関係は永遠ではない、という話が協会ニュースレター（2018-7月号）の中にあります［脚注3］。

この物語のメッセージはおもしろいですね。もっと若いときから理解すればよかった（笑い）。若いときはOKなことも、年を取るとだんだんと変化して、ひとつだけ、永遠が残ります。私たちはその永遠と関係があります。親でも、コミックヒーローでも、恋人でも、奥さんでも、だんなさんでも、息子でも、孫でもない。その永遠とだけ、神様とだけ。どの人間関係もはじめは良いですけれども、一人、一人、離れていきます。

**・📖 （P16 L1）*真の幸福とは内なる「自己」に固有の性質だ。私たちは自分の本性を、すなわち真の「自己」を知ろうという願望を持とうではないか。自己実現のなかにのみ真の至福があるのだ。***

しかし私たちには世俗的な楽しみの経験はあるけれども、「自分の本性が本当の楽しみだ」という経験はありません。経験から、世俗的な楽しみは絶対にあるということは分かりますが、霊的な楽しみはあるのかどうかはどのように確信を持てばよいのでしょう？　その確信が持てなければ、真の自己を知る意義がわからず、やる気は起こりません。そう考えるとこの願望を持つことは少し難しいことだと言えます。

大事なことは、そのときお任せしないといけない、ということです。聖典の言うこと、聖者の言うことを信仰する、信じることができないといけない。それを信じられないと、やる気は難しいです。なぜなら霊的楽しみは（世俗的楽しみのように）すぐには出ないですから。実践と時間がかかるものですから。だからそこまで忍耐しないといけない。

サットワ的な楽しみには二つの特徴があります。

①アビヤーサ（コンスタントな長い修練）によって得られる（👉ギーター18-36）

［手料理はつくるのに時間がかかりますが健康によい、というようにサットワ的な楽しみは時間と手間がかかるものです。決してすぐに食べれるが健康によくない、ファーストフードではない］

②中から出る

次に紹介するギーターの節はすべて「真の至福つまり、永遠に衰えない楽しみ（aksayam sukham）の源は中にある（アートマンである）」と言っている節です。

***外界の感覚的快楽に心惹かれることなく、つねに内なる真我（アートマ）の楽しみにひたっている人は、つねに至高者（ブラフマン）に心を集中し、限りなき幸福を永遠に味わっている［ギーター5-21］***

一時的なものからは一時的な結果しか得られません。永遠な結果は永遠なものからのみ得られます。これは論理的ではないですか？　ふつうの楽しみは、一時的なものが源ですから、永遠の楽しみ・幸せは不可能ということになります。

***感覚的接触による快楽は一時的なもので、のちに悲苦を生ずる原因となる。それ故、初めと終わりとを考え、覚者（ブッダ）は、そのような空しい快楽には心を向けないのだ［ギーター5-22］***

ふつうの楽しみの源は、感覚と感覚の対象が接触（タッチ）することからはじまります。その楽しみには始まりと終わりがあって、最後に悲しみや苦しみがあります。ですから賢い人はそれを好きにはなりません。

***内なる世界で幸福を味わい、心穏やかに過ごし、光り輝く行者（ヨーギー）こそ、ブラフマンとなり、永遠の絶対安楽境（ブラフマニルヴァーナ）に入るのだ［ギーター5-24］***

この節も「内なる世界」と言って中のことについて語っています。バガヴァッド・ギーターが言うことはすべて同じ、「本当の幸福の源は中にある」です。第６章にもあります。

***ヨーガの実習によって心を完全に支配し得たとき、真の平安は得られ、自我の中に真我（アートマン）を見出すことができたとき、自我は真の満足を味わうことができる［ギーター6-20］***

***その境地にある人は、普通の感覚ではなく純粋な知性によってのみ感じ得る最上の歓喜を味わうこととなり、真理から決して離れることはない［ギーター6-21］***

肉体的な楽しみ（例：食事やお風呂）、感覚的な楽しみ（例：映画鑑賞や花の香り）、心の楽しみ（例：友情で心があたたまる）、知的な楽しみ（例：おもしろい本を読む）と楽しみにはさまざまなレベルがありますが、この節にあるbuddhi-grahyam atindriyam（純粋な知性）はそれらのいずれでもなく、それらを超越したもの──アートマンから出ています。ここに挙げた節はすべてアートマンについて言及したものです。

**・📖 （P16 L3）*人の高い「自己」は神の一部であり、実際神とは不可分のものであるが、それでも信仰者は自分の魂よりも神を重視する。彼にとっては神だけが、すべての平安と至福の宝庫だ。***

信者は自分の魂より神にもっとお任せしています。

**・📖 （P16 L4）*自分の内を見つめ、自らのハートのなかに座っておられる神を見出すよう努めなければならない。私たちのこの肉体は神の生きた神殿だ。これはあらゆる聖典のなかで繰り返し強調されている観念だが、最高の神の神殿は、偉大な預言者やリシたちだ。それだから彼らは最大の影響を及ぼすのだ。自分の魂において真理を悟った人だけが、ほかの者に悟りへの道を教えることができる。***

もっとも神聖な場所は自分の中、自分のハートにあります。もちろん寺院に神様はいますが、神がもっともあらわれる神聖な場所は自分の中です。『ラーマクリシュナの福音』の中に***This body of ours is the living temple of God（肉体は神の生きた神殿）***の例があり、それは「神を探そうとあちこち巡礼にでかけても神はみつからなかった。最終的にひとつの場所に座って実践して、そして探し求めるものはすぐ近くにあると悟った」という話や、船のマストにとまる鳥の物語です。（👉『ラーマクリシュナの福音』P410）そして、もちろん神の生きた神殿の最高のあらわれは悟った人です。

**・📖 （P16 L8）*主は常に私たちの心の背後に、私たちの人格の背後におられる。私たちが熱烈なハートで祈ることさえできれば、祈りは聞き届けられるが、さもないと聞き入れられることはない。***

神様はもちろんいます。いますけれども答えていないのはなぜでしょうか？　なぜなら私たちが神が答えてくださるほどには神様を呼んでないからです、祈ってないからです。『福音』に分かりやすい例があります──子どもは遊びに夢中でお母さんを忘れています。子どもが遊びに夢中なあいだはお母さんは自分の仕事をしています。しかし子どもは遊びに飽きると「お母さんはどこ？」と言って泣き出します。お母さんはそれを聞いたら自分の仕事をさておき一目散で子どもの元に走って来ます──私たちも同じです。私たちの神様への憧れや祈りは一時的ですぐに神様を忘れて（この話の子どものように）遊びに行きます。ですから（呼んでないですから）神様は来ないのです。

しかし神はいます。私たちの中に住んでいます。それはどのように証明されるでしょうか？　何の形でいらっしゃるのでしょうか？　ひとつは魂です。ひとつは良心（＊良心の源は神）です。ほかの言葉で言えば自分の本性です。それが神です。

私たちの好むものはそれぞれ異なり、理解できるレベルもさまざまですから、聖典は上記のように各人の好みとレベルに合うようにいろいろな言葉で表現していますが、それらすべては同じものをあらわしています。「中に神様がいます」と「魂があります」は同じことです。

**・📖 （P16 L10）*祈っている間は世俗の幸福について考えてはならない。通常理解されている幸福は、霊性の生活の真の指標ではなく、決して霊的進歩や悟りの証しではない。霊性の幸福は、通常の幸福とは別種のものであり、「あらゆる理解を越えた神の平安」（新約聖書：ピリピ人への手紙4-7）である。***

霊的な楽しみ（spiritual happiness）とふつうの楽しみの違いは何でしょうか？　それは、①「霊的な楽しみの源は中、世俗的な楽しみの源は外」、②「霊的な楽しみは心が静かになる。世俗的な楽しみは心があちこち動く（心が落ち着かなくなる）」です。

「私は楽しみと静けさを合わせたものが欲しい」という人もいるでしょう。しかしそれは世俗的（一時的）なものからは得られません。「楽しみ、静けさ、平安を合わせた真の幸福」は霊的（永遠）なものを対象にして、はじめて得られるのです。このように「霊的生活と世俗的な生活はまったく異なるものだ」とはっきり理解することから霊的生活が始まります（＊はっきり理解するには聖典の勉強が大事です）。

そして霊的生活を目的とする人は、心が落ち着かなくなるような環境や快楽の対象物を避けます。寺院などに行って、心が静かになり落ち着く心地よさや平安という気持ちよさを感じられるようになれば、それがやる気となってしぜんとそうした場所を求めて探すようになり、そうした場所にもっと行きたいと思うようになります。それが霊的生活の始まりです。

霊的な楽しみとふつうの楽しみのどちらを選ぶかは私たち次第です。また「両方好き」「両方欲しい」と考える人も多くいます。しかし両方楽しむことは不可能です。相矛盾するもの同士を欲することは危ない結果を招きます。霊的な場所に行っても楽しめない、世俗的な場所に行っても楽しめない、何も楽しめなくなるのです。それはよくありません。だからどちらかに決めなければなりません。

霊的な生活をおくりたい人が、ときどき世俗的な場所に行かなければいけないこともありますね。避けることが難しいのならば行きますが、いつもコンパスの針は霊性に向けておく。それが霊的な生活であり、これが私が強調したいことです。

また、勉強するだけでは霊的な生活は叶いません。霊的な場所に行くことが非常に重要です。頭で理解することからはじめますが、次の段階はそうした場所を探して行き、霊性の波動をもらうことが重要です。頭の理解だけで、霊的な生活はできません。

**脚注**

［1］モトゥル・バーブはドッキネッショル寺院を建立したラーニー・ラスモニの娘婿。シュリー・ラーマクリシュナを理解し献身的に支えた。贈ったショールが捨てられてもまったく気にしなかった。

［2］『ラーマクリシュナの生涯　上巻』p544より

師は（モトゥル・バーブが1000ルピー出して買った）ベナレス・ショールを着けて、初めのうちは喜んで歩き回っておられた。ショールをつくづくと眺め、人々を呼んで「モトゥルが高いお金を出して買ってくれたのだ」と言いながら見せておられた。ところが次の瞬間にはまったく別の気分になられ、こう思われた。「これにどんな価値があるのか。ある分量のヤギの毛があるだけだ。それはあらゆるものの成分である五要素の、ひとつの変形にすぎない。まぁ、寒さを防ぐという点では…、掛け布団や毛布でも間に合うではないか。このものも他のすべてのものと同様に、少しも神の悟りの助けになるものではない。むしろこれを身につけていると、自分を他者より優れたものであるかのように思い、プライドとエゴティズムを増やしてしまって心が神から遠のいてしまう。ああ、実に欠点だらけだ！」そう思ってショールを地に投げ捨てると、「これはサッチダーナンダを悟る助けにはならない。つばを吐きかけよう」と言って本当につばを吐きかけ、地面にこすりつけられた。モトゥル・バーブがこのショールの運命を知ったとき、彼は少しも残念がらず、かえって「父はよくぞそうなさった」と言ったという。

［3］財布の物語～アフリカ・シュリー・ラーマクリシュナ・センター発行の雑誌『Dipika』より

ある時、1人の老人が汽車でブリンダーバンへの巡礼に向かっていた。ある夜、寝ている間に財布がポケットから落ちた。翌朝、他の乗客がそれを見つけてこの財布は誰のものかと尋ねた。老人は自分のものだと答えた。財布の中にシュリ－・クリシュナの写真が入っていたのがその証拠だった。

老人はその財布にまつわる話を始めた。すぐに彼の周りに何人か集まってきて彼の話に聞き入った。老人は皆に見えるように財布を持ち上げると、こう言った。「この財布には長い歴史があるんだ。ずっと昔、私がまだ子供の頃、この財布を親父がくれたんだ。お小遣いと両親の写真を中に入れて使っていたよ」

「やがて大学に入ると、自分の容姿が気になり始めてね。若者は皆そうだろう。だから、財布には両親の写真ではなく自分の写真を入れたんだ。よくその写真を見ては、自画自賛したものさ」

「結婚すると、興味の対象は自分自身から家族に変わった。財布の中には自分の写真ではなく妻の写真を入れたよ。日中、その写真を何度も取り出して見つめたもんだ。すると疲れなんか吹き飛んでさ、また仕事に集中して取り組めたのさ」

「そして子供が生まれた。父親になることがあれほど嬉しいことだなんて！　毎日仕事が終わると家に飛んで帰って、赤ん坊と遊んだものさ。言うまでもなく、財布の中身は妻の写真から子供の写真に変わった」

老人の言葉が途切れた。目に浮かべた涙を拭いながら、老人は皆を見回して悲しげな声で言った。「皆さん、私の両親はずいぶん前に亡くなり、妻も5年前に先立った。一人息子は結婚したが、仕事と家族で忙しくて私と会う時間はない。私はもう先は長くないし、これから何があることやら。愛した人や自分のものだと思っていたものは、すべて私からなくなったよ」

「今、私の財布の中には主クリシュナの写真が入っている。彼はこれからも決して私のもとを去らない。初めから彼の写真をいつも持ち歩いていればよかった。彼だけが真実、他はすべて過ぎ行く影だ」

ホーリー・マザー・シュリー・サーラダー・デーヴィーはこうおっしゃっています。「わが子よ、恐れてはなりません。この世での結びつきは一時的なものです。今日、これこそ人生で最も大切だと思えたものが、明日は消えて無くなります。本当の結びつきは神との結びつきです。神はあなた自身のもので、永遠の関係です。神はいつも、いつまでも、あなたの世話をしてくださいます。全宇宙に遍在する主に呼びかけなさい。主があなたを祝福してくださいます」

　　　　以上